

いわさき

岩崎6号窯遺跡

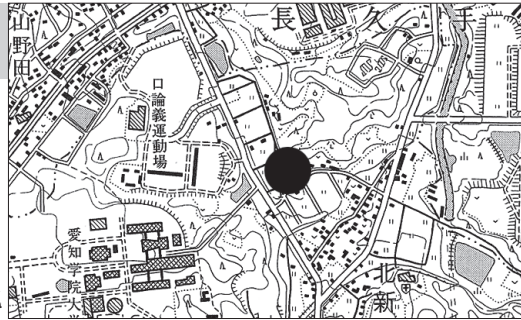
所在地 日進市北新町金萩地内

調査理由 県道日進瀬戸線道路改良

調査期間 平成12年6月～9月

調査積 2,500 m²

担当者 北村和宏・池本正明・宇佐見 守・鈴木達也



調査地点 (1/2.5 万「平針」)

調査の経過 当調査は、県道日進瀬戸線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成12年6月～9月にかけて実施した。調査面積は2,500 m²である。

岩崎6号窯遺跡は、日進市北新町金萩地内に所在し、標高70 m前後の南側に向けて傾斜する緩斜面に立地している。本遺跡は、猿投窯岩崎地区に属し、近隣には、I-9号窯やI-G-10号窯をはじめとして、多数の古窯跡が存在しており、また、付近の史跡として、古墳時代後期の築造とされる白山第一号墳や、戦国時代に丹羽氏の居城であった岩崎城跡が知られている。

調査の概要 調査の結果、奈良・平安時代の集落遺跡を確認している。具体的には、ロクロピットを伴う工房と、竪穴住居・掘立柱建物などの建物跡、土器集積遺構と廃棄土坑などの遺構の他に、粘土採掘土坑や土器成形に適した素地をつくるために粘土を寝かしたと思われる粘土ピットが検出され、当遺跡は集落跡としての性格を帯びることとなった。

工房跡は、削平された部分があるものの、9.5 m × 2.0 mほどの規模があり、直径2.5 cm・深さ20 cmほどのロクロピットを伴うものである。工房跡からは生焼の灰釉陶器が数点出土したが、出土品との関係は不明で、工房自体の性格などの断定は今後の課題である。竪穴住居は、数棟確認されている。斜面下方側が流失し、斜面上方側のみを残存させるものが多い。比較的良好な状態であるS B 01を例にあげると、平面形が3.5 m × 3.0 mほどの規模で、カマドを伴うものである。これらのものは、掘立柱建物も含めて、工房に従事する工人が使用した可能性が高い。

土器集積遺構は、調査区南側に集中する。7基確認されているが、出土品は、生焼であったり歪んでいたりするものの、完形に近い遺物が比較的多い。さらに、廃棄土坑S K 01からも、同じく完形に近い灰釉陶器が2～30点ほど出土している。

遺物 出土遺物は、コンテナ約200箱に及ぶ。このうち主体となるのは土器類である。時期的には、奈良・平安時代に集中する。種類別では須恵器と灰釉陶器が主体を占め、土師器も若干含まれている。器種は豊富で、当該期に属するほとんどの器種を含んでいる。

遺物の出土状況は、大きく二つのあり方に区分できる。前者は竪穴住居に代表されるもので、出土量が乏しく、破片資料が多い。一方、後者のあり方は、本遺跡での特徴的な様相を呈する。主に、土器集積遺構や廃棄土坑に見られる出土状況で、完形品を多く含む土器の集中的な出土である。焼成不良品も目立つ。ここでは、若干ではあるが、窯道具類も含まれている。S U 06や07では、未焼成の粘土塊も検出されている。これらは土器類の

原土である可能性を持つ。また、刀子などの金属製品や砥石などの石製品を若干得ている。なお、そのほかの時期に帰属する資料として、後期旧石器時代のナイフ形石器と縄文時代の石鏃が、各1点ずつ出土している。

ま と め 岩崎6号窯遺跡は、前述したように、猿投窯岩崎地区に含まれている。周知のように、猿投窯は古代における全国屈指の規模を誇る大窯業地である。今回検出された遺構群は、猿投窯岩崎地区の活動期間の一部と年代的に整合している。ところで、今回判明した遺跡の内容もこれと深く関わる様相を示している。特徴的であるロクロピットを付設する工房跡や、焼成不良品を多量に含む廃棄土坑や土器集積遺構などの存在がそれである。また、窯道具の存在もこれを補足するものであろう。

古代における窯業関連集落は、東海地方では初見で、全国的にも数例報告されるのみである。遺構群を詳細に分析を進めれば、古代における手工業生産のあり方をより立体的に考えることができるであろう。

(鈴木達也・池本正明)



第1図 調査区位置図（1：5,000）



航空写真



工房



ロクロピット断面



土器集積遺構



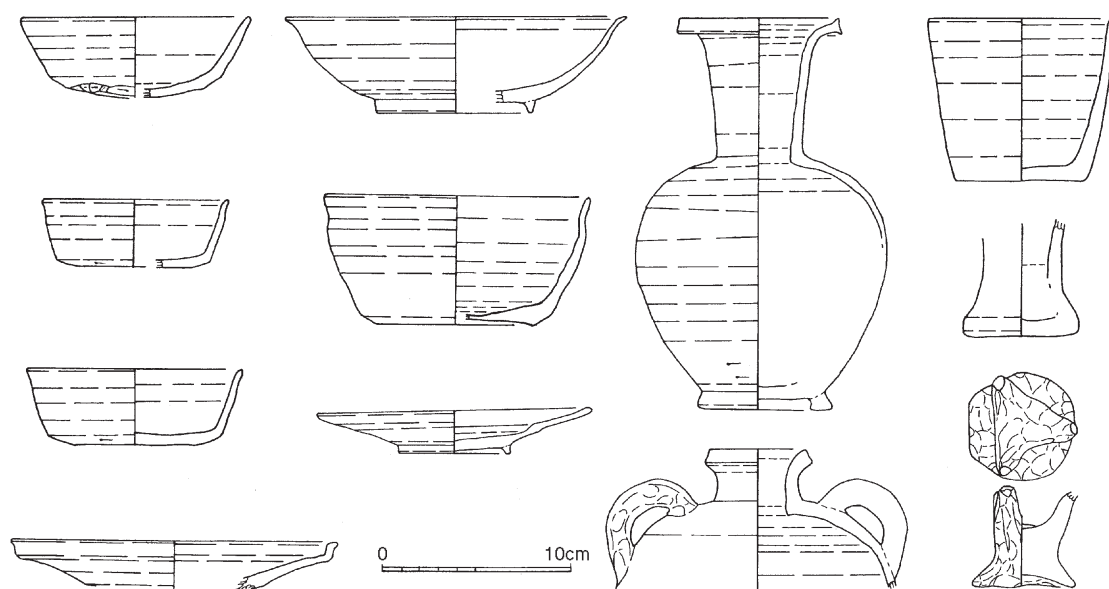
S K 01



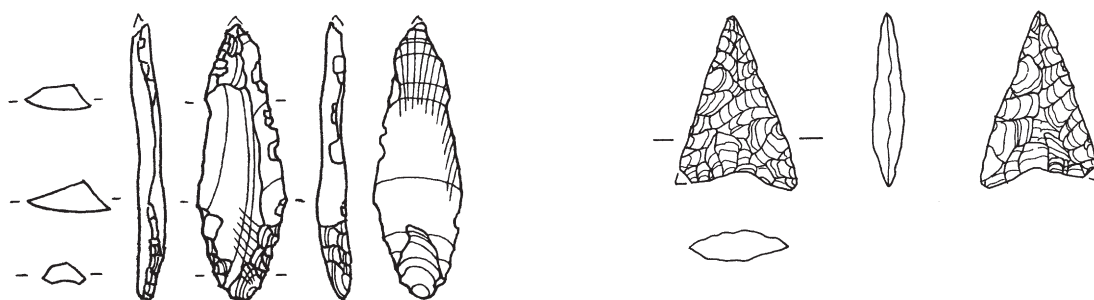
竪穴住居



掘立柱建物



第2図 土器実測図



第3図 石器実測図（1：1）原図斎藤基生氏